

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 日琉祖語の子音連結

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-25 キーワード (Ja): 日琉祖語, 上代日本語, 内的再建, 母音脱落, 子音連結 キーワード (En): Proto-Japonic, Old Japanese, internal reconstruction, vowel deletion, consonant clusters 作成者: 尹, 熙洙 メールアドレス: 所属: 総合研究大学院大学 博士後期課程
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000518">https://doi.org/10.15084/0002000518</a>

## 日琉祖語の子音連結

尹 熙洙

総合研究大学院大学 博士後期課程／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

従来の研究では、日琉祖語は上代日本語と同様に、単純な音節構造を持つ言語として再建されてきた。しかし、上代日本語の内的再建、特に形容詞のク活用とシク活用パラダイムの比較からは、日琉祖語の段階で子音間の母音が脱落する音変化が広く生じ、その結果として日琉祖語には多くの子音連結が存在したことが示唆される。本稿では、母音脱落及び子音連結が再建できる語の具体例を挙げながら、日琉祖語の子音連結がどのように反映されるかを考察する。

また、本稿では母音脱落のパターンがアクセント体系における高起式と低起式の区別に関連している可能性を提示し、母音脱落と式の両方が先日琉祖語における強勢配置に由来する可能性を提案する\*。

**キーワード：**日琉祖語、上代日本語、内的再建、母音脱落、子音連結

### 1. はじめに

#### 1.1 本稿の背景と位置づけ

日琉祖語は、日琉諸族に属する全ての言語の共通の祖先として定義される。研究史の流れから、日琉祖語は日本語と琉球諸語の間の直接的な比較によって導き出されたのではなく、まず上代日本語の内的再建によって4つの母音<sup>\*</sup>i, <sup>\*</sup>u, <sup>\*</sup>ɔ, <sup>\*</sup>aを持つ祖語を再建してから、琉球諸語のデータを参照して<sup>\*</sup>iと<sup>\*</sup>uをそれぞれ更に<sup>\*</sup>i~<sup>\*</sup>e, <sup>\*</sup>u~<sup>\*</sup>oに分けるなどの修正を加えたものになっている (Pellard 2024: 40–42)。したがって、本稿でも「主として日本語の内的再建によって得られた祖語で、必要に応じて琉球諸語データを参照して調整を行ったもの」の意味で「日琉祖語」の用語を用いる。

現在広く認められている再建体系では、日琉祖語の子音は9つ (Frellesvig 2010: 41–42, Pellard 2024: 45–51)、母音は上述の通り6つとなっている。その音素目録は、以下のようである。

- (1) a. 子音：<sup>\*</sup>m, <sup>\*</sup>n, <sup>\*</sup>p, <sup>\*</sup>t, <sup>\*</sup>k, <sup>\*</sup>s, <sup>\*</sup>r, <sup>\*</sup>w, <sup>\*</sup>j  
b. 母音：<sup>\*</sup>i, <sup>\*</sup>e, <sup>\*</sup>a, <sup>\*</sup>ɔ, <sup>\*</sup>o, <sup>\*</sup>u

しかし、当然ながら(1)のような再建が完全であるわけではなく、先行研究ではより多くの現象を説明するために上記の音素目録を拡張することが提案してきた。例えば、Frellesvig and Whitman (2004) は、日琉祖語に7つめの母音<sup>\*</sup>ɛを再建することによって、日琉祖語<sup>\*</sup>Cəi (Cは任意の子音) > 上代中央日本語 Cə̄~Ciという2つの反映を説明できる (<sup>\*</sup>Cəi > Cə̄のみを認め、Ci

\* 本稿は2024年4月23日に第270回NINJALサロンにて発表した内容をもとにしている。また、本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」(プロジェクトリーダー：浅原正幸)のサブプロジェクト「日本・琉球諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」(プロジェクトリーダー：五十嵐陽介)及びJSPS科研費JP24KJ1152の成果の一部である。

になるものに対しては<sup>\*</sup>Ciiを再建する)と同時に、中期朝鮮語との音韻対応も規則的になることを指摘した(言語の名称や語形の表記については1.2参照)。また、Unger (2008) は、<sup>\*</sup>w, <sup>\*</sup>jの代わりに<sup>\*</sup>b, <sup>\*</sup>dを再建する有声阻害音弱化説の立場から、弱化しない<sup>\*</sup>g > <sup>ŋ</sup>を説明するために、<sup>\*</sup>gに加えて<sup>\*</sup>ŋを再建する(<sup>\*</sup>gはØに弱化し、<sup>\*</sup>ŋが<sup>ŋ</sup>になる)ことを提案している。しかし、このような提案は朝鮮語との比較や漢字音の対応規則などといった外部的な要素を視野に入れたものであり、新しい音素の設定を裏づける内部的な根拠が不十分であったため、定説的地位を得るには至っていない。

本稿では、新しい音素を追加するのではなく、従来の再建において濁音の由来として想定された<sup>\*</sup>NC (Nは任意の鼻音)に加えて、より多くの子音連結を許容するように音素配列の制約を緩和することによって日琉祖語の再建体系を拡張する。本稿の枠組みでは、これらの(\*NC以外の)子音連結は本来(再建できる最も早い段階から)語根に含まれていたのではなく、子音で終わる形態素と子音から始まる形態素の連結によって、または子音間における母音の脱落によって生じたものとされる。母音脱落のパターンは、後のアクセント体系における高起式と低起式の区別に関連していることが示唆されるが、母音脱落の具体的な条件は、現段階ではまだ特定できていない。

## 1.2 言語の名称と表記

本稿では、主として『万葉集』卷14・卷20に収録された歌に見られる、非中央的特徴を持つ上代日本語の諸方言を「上代東国日本語」と称する。この伝統的な定義についてKupchik (2023: 1) は、「上代東国日本語」が一つの方言連続体を形成しないことを指摘し、伝統的に上代東国日本語と呼ばれてきた諸方言のうち、遠江国・駿河国・信濃国の方言を Tōpo-Suruga Old Japanese (上代中部日本語?)、それ以外を Eastern Old Japanese (上代東部日本語?) としている。しかし、本稿では便宜上これらを区別せず、代わりに上代東国日本語の歌を引用するときは国名を記載する。また、飛鳥・奈良を中心とする上代日本語の中央的方言を「上代中央日本語」と呼ぶ。

上代日本語の実用表記として、上代特殊仮名遣の甲類音節の母音に曲折符号(ô)、乙類音節の母音に分音符号(ö)をつけて区別する。濁音が前鼻音的要素を持っていたとされる言語の語形においては、同器官的鼻音の上付き文字で前鼻音的要素を表し、濁音を<sup>m</sup>b, <sup>n</sup>d, <sup>n</sup>z, <sup>n</sup>gのように表記する。斜体は実用表記であることを表す。

## 2. 子音間における母音の脱落

### 2.1 母音脱落の定義

本稿が提案する子音連結の起源の一つは、母音の脱落である。ここで言う母音脱落とは、上代日本語のV<sub>1</sub>V<sub>2</sub>(V<sub>1</sub>, V<sub>2</sub>はそれぞれ任意の母音) > V<sub>1</sub>またはV<sub>1</sub>V<sub>2</sub> > V<sub>2</sub>のような、母音衝突(hiatus)を回避するための母音脱落ではなく、C<sub>1</sub>VC<sub>2</sub> > C<sub>1</sub>C<sub>2</sub> > C<sub>2</sub>(C<sub>1</sub>に鼻音の要素がある場合は濁音<sup>n</sup>C<sub>2</sub>)のようなものである。本稿では母音衝突の母音脱落と区別するために、必要な場合はこれを「子音間の母音脱落」と呼ぶ。この子音間の母音脱落は、上代日本語においては主に形態素境

界に隣接する音節の狭母音が脱落する例が知られている。その例として、Erickson (2004: 499–500) は以下の 7 語を挙げている（下線は脱落箇所）。

- (2) a. *amî* 「網」 + *pik-i* 「引く-NMLZ」 > *a<sup>m</sup>biki* 「網で魚を捕ること」
- b. *paya-p̄itō* > *payatō* 「隼人」
- c. *kīḡisi* > *kīnzi* 「雉」
- d. *mura* 「村」 + *nusi* 「主」 > *mura<sup>n</sup>zi* 「連（姓）」
- e. *nurite* > *nute* 「鐸」
- f. *nusum-î* 「盜む-NMLZ」 + *pitō* 「人」 > *nusu<sup>m</sup>bitō* 「泥棒」
- g. *osi-saka* > *osaka* 「忍坂（地名）」

このような母音脱落は、現存する上代日本語の言語資料からは散発的であるように見えるが、(2d) と同じ後部要素 *nusi* 「主」を共有する *tō<sup>n</sup>zi* 「主婦」（前部要素は *tō* 「戸」）、(2e) と音韻環境が非常に似ている *pumî* 「文」 + *te* 「手」 > *purde* 「筆」などの例が知られており、それらの例を考えると、本来はある程度の規則性があったと考えられる。

しかし、(2) の例だけでは、子音間の母音脱落の本質を把握することはできない。まず、(2) の例の一部は、日琉祖語の時代に完了した母音脱落ではなく、上代日本語以降の二次的な変化の可能性がある。また、(2) の 7 語においては、脱落した母音が全て狭母音であるため、この音変化を特定の条件で狭母音が削除される規則としてとらえることも可能である。2.2 では、上代日本語の形容詞活用の内的再建によって、日琉祖語の段階でも既に母音脱落が生じていたこと、そして日琉祖語の母音脱落が狭母音に限られた音変化ではないことを示す。

## 2.2 母音脱落と上代日本語の形容詞活用の内的再建

上代日本語の形容詞は、ク活用とシク活用に分けられる（Frellesvig 2010: 80–81, Vovin 2020: 390 などの記述参照）。ク活用形容詞 *taka-* 「高い」とシク活用形容詞 *kanasi-* 「悲しい」の代表的な活用形を以下に挙げる。

	ク活用	シク活用
	<i>taka-</i> 「高い」	<i>kanasi-</i> 「悲しい」
終止形	<i>taka-si</i>	<i>kanasi</i>
連体形	<i>taka-ki</i>	<i>kanasi-ki</i>
連用形	<i>taka-ku</i>	<i>kanasi-ku</i>

一般的に (3) の活用体系は、終止形の語尾が *-si*、連体形の語尾が *-ki* (< 日琉祖語 \*-ke)<sup>1</sup>、そして連用形の語尾が *-ku* であるという風に分析され、シク活用形容詞は語幹が *si* で終わる形容詞

<sup>1</sup> 主に上代東国日本語に見られる連体形語尾 *-kē~-kē* との比較から、日琉祖語 \*-ke が再建される (Frellesvig and Whitman 2004: 286, Vovin 2020: 416)。

であり、語幹が *si* で終わる場合に限っては終止形語尾 *-si* の代わりに、その異形態 *-Ø* が現れるという解釈が行われている（例えば Martin 1987: 51, Vovin 2020: 390）。

しかし、そのような解釈では説明できない点がある。一つは、名詞とク活用形容詞の語根からなるシク活用形容詞語幹の存在である。（4）にその例を挙げる。

- (4) a. *ura* 「心」 + *yō-* 「良い（ク活用）」 = *uresi-* 「嬉しい（シク活用）」  
 b. *tōkī* 「時」 + *na-* 「無い（ク活用）」 = *tōkinzī-* 「季節を知らない（シク活用）」

(4a) は、Martin (1987: 843) などに見られる伝統的な語源説である。（4b）は、左辺と右辺の終止形をそれぞれ比べると、(5) に示したように右辺は左辺から下線部の母音を除いたものに対応しており、(4a) と平行的な関係にあることがわかる。

- (5) a. *ura* + *yōsi* = *uresi* (*e* < \*ai)  
 b. *tōkī* + *nasi* = *tōkinzī* (*nz* < \*ns)

(5) の対応関係から、ク活用とシク活用の区別は本来存在せず、活用語尾の部分で母音脱落が生じた形容詞がク活用、生じていない形容詞がシク活用になったという風に再建することができる。以下では、脱落する母音に抑音符号 (⌚) をつけて表す<sup>2</sup>。

(6)	形容詞語根単独の語幹	名詞と形容詞語根からなる語幹
終止形	*jēsi > <i>yōsi</i>	*ura-jēsi > *urajēsi = *uraisi > <i>uresi</i>
連体形	*jēsike > *jēske > <i>yōkī</i>	*ura-jēsike > *urajsike = *uraisike > <i>uresiku</i>
連用形	*jēsiku > *jēsku > <i>yōku</i>	*ura-jēsiku > *urajsiku = *uraisiku > <i>uresiku</i>
終止形	*nasi > <i>nasi</i>	*tēki-nāsi > *tēkinsi > <i>tōkinzī</i>
連体形	*nasike > *naske > <i>naki</i>	*tēki-nāsike > *tēkinsike > <i>tōkinzīkī</i>
連用形	*nasiku > *nasku > <i>naku</i>	*tēki-nāsiku > *tēkinsiku > <i>tōkinzīku</i>

このような再建体系では、*uresi-*, *tōkinzī-* がク活用にならないことを、\*ura-jēsike, \*tēki-nāsiku のように隣接する 2 つの音節の母音が両方脱落することは不可能という規則を想定することによって説明することができる<sup>3</sup>。

以上の仮説を採ると、母音脱落は母音の種類 (vowel quality) ではなく、位置 (語の何音節目に当たるか) によって条件づけられるということになる。例えば、狭母音の \*i だけではなく、中段母音の \*u や広母音の \*a でも、脱落する位置 (以上の例では、3 音節を超える語の第 3 音節) であれば、脱落する。第 3 音節における母音脱落の傾向は、(7) の琉球祖語の例からも確認できる。

<sup>2</sup> 現時点では、母音脱落の条件が完全に把握されていないため、これは結果論的な表記である。

<sup>3</sup> 例えば、強勢音節の直前の非強勢音節の母音が脱落するという規則、または強勢音節の直後の非強勢音節の母音が脱落するという規則（本稿の第 4 節でもそのような体系を試みている）を考えれば、隣接する 2 つの音節の母音が両方脱落することはない。

- (7) *\*itoma* 「暇」 + *\*na-* 「無い（ク活用相当）」 = *\*itonasi-* 「忙しい（シク活用相当）」

琉球祖語 *\*itonasi-* は、日本語 *itona-* に対応する語で、『おもろさうし』卷5に「いぢよなしや」(*\*itcuna-ča* < *\*itonasi-sa*) という形で在証される。「忙しい」に含まれる *\*ito-* と *\*itoma* の不一致を、後者を *\*ito-ma* 「暇-時間」のような複合語として分析することによって簡単に解決できるように見えるが、そのような語源説は比較によって支持されない。琉球祖語 *\*itoma* は、上代中央日本語 *itōma*、上代東国日本語 *iñduma* (万葉集 20.4327 遠江) に対応するが、上代遠江方言では *\*kaju-ap- > kayup-* 「通う」のように *\*ua > u* の変化を想定できるため (上代駿河方言に関する Kupchik 2011: 116 の提案を参照)、これらの語は日琉祖語 *\*ituama* に遡るものとするのが妥当である。この *\*ituama* の語源は定かではないが、可能性として *\*itu-ama* 「仕事?-余り?」のようなものが考えられる (*\*itu-* 「仕事」は *iti* 「市」の被覆形相当?)。いずれにしても、日本語の *itona-* や琉球祖語の *\*itonasi-* の前半を説明するためだけに *\*ituama* を *\*itua-ma* とするのは循環的である。一方で、(7) のような母音脱落による説明は、(6) と同じ第3音節の母音脱落によって *\*itonasi-* という形を予測することができる<sup>4</sup>。

また、(7) の例は、(6) の母音脱落の位置が「後部要素の第1音節」ではなく「語の第3音節」であることを示す重要なデータでもある。多くの形容詞は2音節の語幹を持つため、「3音節を超える語の第3音節母音は脱落する」のような規則だと、語尾に母音脱落が生じ、ク活用になることが予測される。

(3) の活用形の母音脱落仮説に基づいて再建された祖形は、以下のようになる。

	ク活用	シク活用
	<i>*takas-</i> 「高い」	<i>*kanas-</i> 「悲しい」
終止形	<i>*takas-i</i>	<i>*kanas-i</i>
連体形	<i>*takas-ik-e</i>	<i>*kanas-ik-e</i>
連用形	<i>*takas-ik-u</i>	<i>*kanas-ik-u</i>

この仮説では、語幹末子音 *\*s* を認めることで、終止形語尾を動詞 *ar-* 「ある」と同じ *\*-i* にすらすことができるようになり、*-si* という活用語尾を想定する必要はなくなる<sup>5</sup>。また、連体形と連用形は *\*-ik-* の部分が共通しているので、それを一つの形態素として分離することができる<sup>6</sup>。こ

<sup>4</sup> ただ、3音節の語幹を持つ(6)の2語とは違って、(7)は4音節の語幹を持つので、第3音節の母音と活用語尾(第5音節)の母音が両方脱落することも可能であるよう見える。ク活用の日本語 *itona-* と、シク活用相当の琉球祖語 *\*itonasi-* の違いは、第5音節の母音脱落の有無によって説明できる。

<sup>5</sup> 動詞 *ar-* と形容詞は、状態を表す意味を持つという共通点がある。また、形容詞の連用形が古くは名詞化として使われていたことが『古事記』の *tōkiʷziku nō kāgu nō kōnōmi* のような用例からうかがえるが (Frellesvig 2010: 86)、名詞化の *-aku* が *ar-* の形容詞的な連用形 *\*ar-ik-u* に由来する可能性があり、*ar-* と形容詞の活用の間には、ある程度の平行性が観察される。

<sup>6</sup> 上代日本語 *pasikēyasi~pasikiyasi-pasikiyōsi* は、その原形として *\*pas-ik-e ajas-i* 「愛しくて特別な」を想定すべきである (*pasikiyōsi* は *\*pas-ik-e j̥s-i* という別の形に由来する可能性もあるが、恐らく *pasikēyasi~pasikiyasi* の語源が忘れられてから、意味が通じるように後半を「良い」に修正したものと考えられる)。この語においては、連用形が期待される位置に連体形相当の形 *\*pas-ik-e* が出現し、連体形と連用形が本来は共通する機能を持っていたことを示唆する。

のように、母音脱落仮説は、上代日本語の形容詞活用の体系をより合理的に説明できるという利点を持つ。

### 3. 母音脱落に由来する子音連結を持つ語の例

子音の間における母音脱落を設定すれば、その結果として必然的に子音連結が生じることになる。したがって、語源説によって母音脱落が想定される箇所には子音連結の存在が期待され、逆に子音連結の存在から母音脱落を再建することもできる。本節では、母音脱落に由来する子音連結を持つ語の例を挙げながら、その子音連結の反映について述べる。

#### 3.1 否定の接頭辞 \*na- とその母音脱落形 \*n- < \*nà-

上代日本語の濁音は日琉祖語 \*NC (N は鼻音 {\*m, \*n}, C は阻害音 {\*p, \*t, \*k, \*s}) に由来することが知られている。上代日本語の継承語には、濁音から始まる語は殆ど存在せず (Frellesvig 2010: 43)，これは語頭に子音連結を持つ語根が存在しなかったからと考えられる。しかし、例外として形容詞 <sup>ŋ</sup>götö- 「同じようである」の存在が知られているため、<sup>ŋ</sup>götö- の語頭濁音 <sup>ŋ</sup>g を説明する必要がある。

日本語には「別であること」を意味する名詞 *koto* があり、上代日本語においても *kötö ni* の用例が見られる<sup>7</sup>。上代日本語では、形容詞の語幹が繋辞 *n-* の活用形 *nō, ni* などとともに使われる事が多く (Vovin 2020: 377)，「別であること」は形容詞的な意味であることから、この *koto* は本来形容詞語幹 \*kətəs- 「別である」に由来する可能性が高い。

また、上代日本語には動詞の連用形について禁止を表す接頭辞 *na-* があり、主に *-sō*と一緒に使われ、接尾辞 *na-...-sō* をなす (Vovin 2020: 512–513)。接頭辞 *na-* は、*-sō* を伴わずに単独で使われる場合でも連用形接続であるが、*sō* は *se-* 「する」と同根とされるため、本来は連用形 + *sō* が命令の意味を持ち (英語 *do V* のように)、*na-* は否定・命令の両方を表すのではなく、否定の機能だけを持っていたと考えるのが妥当であろう。日琉祖語において否定の接頭辞 \*na- を再建することによって、以下の形が説明できるようになる。

- (9)
  - a. \*nà-kətəs- > \*nkətəs- > <sup>ŋ</sup>götö- 「同じようである」
  - b. \*nà-s-u > \*ns-u > -<sup>n</sup>zu
  - c. \*nà-n- > \*nn- > -n-

まず、<sup>ŋ</sup>götö- 「同じようである」と \*kətəs- 「別である」は逆の意味を持っているので、(9a) のように前者を後者の否定形とすることによって、語頭の濁音 <sup>ŋ</sup>g を説明することができる。(9b) と (9c) は、上代日本語における動詞の否定形式に見られるものである。従来の再建では、否定を表す *-an-* を想定し、*-a<sup>n</sup>zu* は *-an-* の連用形 *-an-i* に *se-* 「する」の終止形 *su* がついた形として

<sup>7</sup> 「殊」(万葉集 7.1314) 「殊異」(万葉集 12.3099) と書かれ、表音表記の例はないが、CoCo の語は CōCō が多いことが知られているため、*kötö* とみなすことができる。

分析されてきた。しかし、上代日本語で否定の意味を持つ様々な形式のうち、語頭に表れることができる形容詞 *na-* 「無い」と禁止の *na-* はいずれも子音 *n* から始まるので、従来 *-an-* とされたものについても、*-a* と *n-* を分け、前者は動詞の活用語尾、後者は独立した否定の意味を表す形式に属していたものと考えるのがより自然であると言える。

#### (10) 従来の分析

- a. *sir-an-i s-u* 「知る-NEG-INF する-IND」 > *sir-a<sup>n</sup>zu*
- b. *sir-an-u* 「知る-NEG-ATTR」
- c. *sir-an-i* 「知る-NEG-INF」

#### (11) 否定の接頭辞 *\*n- < \*nà-* を想定

- a. *\*sir-a nà-s-u* 「知る-PTCP NEG-する-IND」 > *\*sir-a ns-u* > *sira-n<sup>n</sup>zu*
- b. *\*sir-a nà-n-o* 「知る-PTCP NEG-COP-ATTR」 > *\*sir-a nn-o* > *sira-nu*
- c. *\*sir-a nà-n-i* 「知る-PTCP NEG-COP-INF」 > *\*sir-a nn-i* > *sira-ni*

### 3.2 子音交替 *m~n* と子音連結 *\*mj*

日琉諸語には、特に語頭において、*m~n* の子音交替を示す語が多数存在する。例えば、上代中央日本語の *nipa* 「庭」や *nipi* 「新しい」は、それぞれ琉球祖語 *\*mi[w]a*, *\*mi[w]i* に対応する。同様に、日本語 *nina* 「川蟻」は琉球祖語 *\*mina* に対応し、上代中央日本語にも枕詞 *mina nō wata* の一部として *mina* の形が見られる。また、『古事記』歌謡の *mipōndōri* 「カイツブリ」に対して『万葉集』の *nipo<sup>n</sup>dōri* のように、上代中央日本語の中でも文献によって子音が異なるものもある。

この *m~n* 交替に似たような現象として、日本語の *n~d~y* 交替がある。例えば、「避ける」を意味する *nok-*, *dok-*, *yok-*, 「捩じる」を意味する *nedi-*, (*detti-?*), *yodi-* がその例である。特に「捩じる」の場合は *modi-* という形もあり、*m~n* を含む *m~n~d~y* の交替になっている。この 4つの子音 (*m, n, d, y < \*m, \*n, \*d, \*j*) の中で、*\*j*だけが唯一歴史的に鼻音的要素を持っていなかったので、*y* から始まる形を本来のものとし、残りは *\*m* から始まる接頭辞がついた形に由来すると考えられる。具体的には、「避ける」「捩じる」の場合、その意味が体を（または体の一部を）動かすことに関連していたと考えると、*mi* 「身」の被覆形 *mu-* がついた形を再建することができる。

#### (12) *\*jək- > yok-*

*\*mù-jək- > \*mjək- > nok~dok-*

「庭」「新しい」「川蟻」「カイツブリ」の例では、*y* から始まる形が見られないので、*\*mj* は接頭辞ではなく語根内の母音脱落によって生じたものと考えるべきである。特に、「庭」「新しい」「カイツブリ」の 3 語は、高起式のアクセントを持ち、*mip~nip* から始まるので、共通の語根を持つ可能性が考えられる。

まず、中古日本語 *nifaka* や、上代東国日本語 *nipasi-*（万葉集 20.4389 下総）の存在から、この語根に「新しい」だけではなく「急に」「突然」の意味があったことは明らかであるが、「カイツ

ブリ」は速い動きを特徴とする鳥で、その属名 *Tachybaptus* も古代ギリシャ語の *ταχύς* 「速い」と *πάπτω* 「水に入る」から命名されている。上代中央日本語 *mipōndōri-nipondōri* には、*tōri* 「鳥」の連濁形 *-ndōri* が含まれているように見えるが、上代中央日本語では、この語は常に *mipōndōri-nipondōri* として使われ、*mipō-nipo* の部分が単独で現れることはない。したがって、*mipōndōri-nipondōri* は語根 *mip-*~*nip-*「突然」と *wondör-i*「飛び跳ねる-NMLZ」からなる複合語で、「急に動き出す鳥」の意味であると考えることができる。

「新しい」と「急に」「突然」の意味的関連性は明白なので、残りは「庭」だけであるが、母音脱落仮説の観点からは \**mip-*~*nip-* < \**mijip-* < \**mVjip-* であることが予測されるため、この語根は *mōye-*「芽ぐむ」と \**mōj-* の部分を共有する可能性がある。つまり、「芽生えたばかりの」という本来の意味から、「植物が生えている空間」を意味する名詞化「庭」が派生した後、語根そのものは「新しい」「突然」への意味変化を経験したと考えられる。

### 3.3 子音連結 \*mj と「虹」—二重母音 \*io の反映

「虹」は、中古日本語 *ninzi*、上代東国日本語 *nōnzi*（万葉集 14.3414 上野）、琉球祖語 \**no<sup>a</sup>dzi* のほか、現代日本語の諸方言に *myoozi* のような形が広く分布する（国立国語研究所 1974: 27）。この *myoozi* を 3 音節形 \**mijo<sup>a</sup>zi* < \**mijoNsi* のような形に遡るものと仮定すると、2 音節形の *ninzi*, *nōnzi*, \**no<sup>a</sup>dzi* は、自然と第 1 音節母音脱落形 \**mijoNsi* > \**mjoNsi* に由来するということになる<sup>8</sup>。例えば、中央方言においては以下のようないくつかの変化が考えられる。

- (13) \**mijoNsi* > \**mjoNsi* > \**nioNsi* > 中古日本語 *ninzi*

3.2 では、上代中央日本語で \**mj* > *m* を示す語の例として *mina* (*nō wata*) と『古事記』の *mipōndōri* を挙げたが、前者は枕詞で、後者の場合は『万葉集』に *nipo<sup>a</sup>dōri* が見られる。つまり、上代中央日本語で \**mj* > *m* の反映は、化石化した形や保守的な表記の文献に限られ、一般的には \**mj* > *n* になっていたと考えても良いはずである。

また、(13) では、中央方言において日琉祖語 \**io* > *i* の変化を仮定した。これは、Ramsey and Unger (1972: 291) によって提案された \**iu* > *i-yu* の再建を継承し、\**u* の部分を \**o* に修正したものである。Ramsey and Unger (1972) は、*ik*-~*yuk*-「行く」のような交替を説明するためにこの \**iu* の再建を提案したが、本稿では \**io* が直接的に *i-yu* になったわけではなく、語頭において \**io* と \**jo* の区別が難しかったため、\**io* が散発的に \**jo* に崩壊 (decay) し、通常の中段母音上昇によって *yu* になったという風に考える。

二重母音 \**io* の再建は、上代日本語 *i*「50」の存在によっても支持される。この語は非常に短く、*misō*「30」や *yasō*「80」などと共に通する部分は見られないが、*i*「50」<\**i-o* を再建することによつ

<sup>8</sup> 現代諸方言の *myoozi* 系の形には、*b* や *z* (< \**d*) で始まるものもあり、これらは各地域の基層方言における \**mj* の反映に影響されている可能性がある。3.2 の *dok-*, *detti-* 参照。このように、日本語において \**mj* の反映が濁音になる最も古い例としては、『日本書紀』歌謡に見られる *"derap- = nerap-*「狃う」がある。「狃う」は、「視線が集まる」という意味で \**mā-jər-ap-*「目-寄る-ITER」のような語源を仮定すると、\**mj* から始まる祖形 \**mjərap-* が再建される。

て、\*mis-o や \*jas-o と共に通する \*-o 「×10」を分離することができる<sup>9</sup>。更に、母音脱落仮説の観点からは、*tōwo* 「10」も \*pítə-o 「1×-10」> \*ptə-o の反映として説明される。

### 3.4 子音連結 \*mj と「猫」—上昇三重母音 (rising triphthong) の反映

「猫」は、日本語 *ne-ko*、琉球祖語 \*majo である。アイヌ語の一部の方言には *meko* 「猫」という語が見られるが、*ne-ko* との語形の類似から日本語の古い方言形 \*me-ko の借用と考えられるため、\*me-ko と *ne-ko* は *m~n* の子音交替の例の一つになる。

母音脱落仮説の観点からは、\*me~ne は \*mjV に遡るので、\*me~ne は \*majo の第1音節母音脱落形 \*màjo > \*mjo として説明できるように見える。しかし、中央方言で \*mjo > \*nio > ni が予測されるため (3.3)，そのような再建はできない。一方で、アイヌ語の「猫」を意味する語には *cápe~cappe* があり (服部 1964)，「散らかす」を意味する語根 *car* に名詞化の -pe がついた形に見える。もしこれが日琉祖語からの翻訳借用 (またはその逆) であれば、日本語の「猫」は上代中央日本語 *mayóp-* < \*maju-ap- 「ほつれる」と同根の可能性がある (本来の意味は「乱れる」?)。したがって、本稿では \*majua 「猫」を再建する。この \*majua の第1音節母音脱落形は、\*mjuə > \*niua のように三重母音を持つことが予測されるが、上昇三重母音 \*V<sub>1</sub>V<sub>2</sub>V<sub>3</sub> (V<sub>1</sub> と V<sub>2</sub> は狭母音) が \*V<sub>1</sub>V<sub>3</sub> に崩壊するすれば、\*niua > \*nia > ne になり、*ne-ko* の *ne* と一致する。

このような \*iua > \*ia の仮定は、「猫」を説明するためだけのものではない。例えば、*sakēmb-* 「叫ぶ」の後半を *yōmb-* 「呼ぶ」とする語源説があるが (Martin 1987: 746)，これもまた \*sak-juaNp- > \*sakiuaNp- > \*sakiaNp- > *sakēmb-* という風に説明できる。

### 3.5 子音連結 \*mj と「恨む」—曲折三重母音 (rising-falling triphthong) の反映

上代日本語において、感情を表すシク活用形容詞と上二段活用動詞の間には、(14) のような対応関係がある。

- (14) a. *kōposi-*, *kōpī-* < \*k[ɔ]pos-, \*k[ɔ]poi- 「恋しい (恋しく思う)」  
b. *sambusi-*, *sambī-* < \*saNp[u]s-, \*saNp[u]i- 「寂しい (寂しく思う)」

一方で、*uramēsi-* 「恨めしい」と *urami-* 「恨む」 < \*uramī- は対応しないように見える。しかし、母音脱落仮説では、\*ura-mjas-, \*ura-mjai- < \*ura-mòjas-, \*ura-mòjai- を再建することによって、この不一致を解決することができる。まず、*urami-* < \*ura-mòjai- 「恨む」は「心-燃える」の意味になるので、意味的な蓋然性が高い。また、*uramēsi-* < \*ura-mòjas- 「恨めしい」は、形容詞語幹で第3音節母音脱落を経験しているということになるので、2.2 で述べた傾向と一致する。

- (15) a. \*ura-mòjas- > \*ura-mjas- > \*uramias- > *uramēsi-*  
b. \*ura-mòjai- > \*ura-mjai- > \*uramiai- > \*urami-

<sup>9</sup> *misorndi* のような濁音形の存在から、\*-o ではなく鼻音で終わる \*-oN で、周辺の諸言語と比較できる可能性がある (中世韓国語 -on~-un 「×10」やアイヌ語 *wan* 「10」など)。

この例からは、以下の二つの点が確認できる。一つは、母音の間の \*mj は、語中の \*mj とは違つて、中央方言で *n* に変化せず、*m* の反映を示すという点である。もう一つは、曲折三重母音 \*V<sub>1</sub>V<sub>2</sub>V<sub>3</sub> (*V<sub>1</sub>* と *V<sub>3</sub>* は狭母音) は \*V<sub>2</sub>V<sub>3</sub> に崩壊するという点で、同様の崩壊が観察される他の語の例として *sungī-* 「過ぎる」が挙げられる。

上代中央日本語 *sungus-* 「過ごす」と *sungī-* 「過ぎる」は、*kōs-* 「越す」と *kōye-* 「越える」にそれぞれ意味的に近いことから、*kōs-*, *kōye-* に接頭辞 \*suN- がついた形という語源説が考えられる。その場合、\*suN-kos- > *sungus-* の再建には問題がないが、\*suN-kōjVi- > *sungī-* は母音脱落を想定する必要がある (\*suN-kōjVi- > \*suNkjVi- > \*suNkiVi > *sungī-*)。ここで、\*NkiVi が上代中央日本語 *ngī* になるためには、\*V<sub>1</sub>V<sub>2</sub>V<sub>3</sub> > \*V<sub>2</sub>V<sub>3</sub> に崩壊しなければならない。

### 3.6 子音連結 \*tj と「力」一二重母音 \*io のもう一つの反映

『類聚名義抄』のアクセント表記では、*tikara* 3.3 HLL 「力」のアクセントが *mi<sup>n</sup>dukara* 4.3 HHLL, *te<sup>n</sup>dukara* 4.10 LHLL? 「自分で」の後ろの部分と一致する。意味的にも「自分の体の力で」という風にとらえられるので、*mi<sup>n</sup>dukara*, *te<sup>n</sup>dukara* の *-<sup>n</sup>dukara* は *tikara* の連濁形である可能性を考慮する必要がある。

しかし、母音が *i* と *u* で一致しないので、第1音節では *i*、第1音節以外では *u* と反映される母音が必要となる。3.3 では、二重母音 \*io の再建を提案し、\*io を含む語の例として \*iok- > *ik-* 「行く」を挙げた。ここで、「行く」を含むとされている (Martin 1987: 677) *aruk-* 「歩く」を \*ariok- と再建すると、二重母音 \*io は第1音節では *i*、第1音節以外では *u* に変化するということになる。この \*iok- と \*ariok- の再建に関しては、上代日本語の動詞接頭辞 *i-* (Vovin 2020: 505–512) と *ari-* (Vovin 2020: 520–522) の存在も参考になる。

以上の議論から、「力」の祖形として \*tiokara を再建でき、この \*io の由来として、母音脱落仮説の観点からは \*tiokara < \*tVjokara のような第1音節母音脱落を想定することができる。この \*tVjokara の前半は *tuyo-* 「強い」と一致するので、本稿では \*tūjokara > \*tjokara > \*tiokara > *tikara* -*<sup>n</sup>dukara* を再建する。

### 3.7 子音連結 \*jw と「病む」—\*{r,j}ua の散発的な単純化

上代中央日本語 *yamapi* 「病気」は、上代東国日本語に *yumapi* (万葉集 20.4382 下野) の例があり、*nayam-* 「悩む」もまた上代東国日本語に *nayum-* (万葉集 14.3533 不明) が見られる。これらの語は、「病む」の語根を含むものと考えられるが、「病む」の祖形として \*jam- を再建すると、*yumapi* や *nayum-* の *yum-* という形を説明することが難しい。

本稿では、上代中央日本語 *para* 「原」と琉球祖語 \*paro < \*parua の例を参考にし、\*{r, j}ua の発音が難しいことから、中央方言では \*ua > *a* / {r, j}\_ の単純化が散発的に生じていると考える。上代東国日本語には、\*ua > *u* の例があるので、「病む」の祖形として \*juam- を再建することによって、中央方言の *yam-* と上代東国日本語の *yum-* の両方を説明できるようになる。更に、この \*juam- は \*jowam- 「弱くなる」の母音脱落形 (\*jōwam- > \*jwam- > \*juam-) であるという風に考えること

ができる<sup>10</sup>。

### 3.8 子音連結 \*mn と「涙」—Lyman の法則の一般化

「涙」は、上代中央日本語において *namita-namida* の清濁交替を示す。*na-* の部分が *ma-na* 「目-GEN」の母音脱落形に当たると仮定すると、(16) のようになる。

(16) \*mà-na-miNta > \*mnamiNta > \*mnamita~\*namiNta > *namita-namida*

この \*mnamiNta > \*mnamita~\*namiNta の交替は、Lyman の法則の一般化によって説明できる。日琉祖語においては、Lyman の法則の背後に「一つの語の中に二つの \*NC 子音連結は許されない」という音韻論的な制約があったと考えられる。連濁の場合は、一貫して前部要素と後部要素との間の \*N を削除したほうが覚えやすいので、そのような法則として定着しただけで、本来は複数の \*NC のうち、どれを削除するかは特に決まっていなかったように思われる。また、\*C が阻害音の場合だけではなく、鼻音である場合 (\*NN) も、\*NC 子音連結として数えられていた。

以上の仮定から、\*mà-na-miNta > \*mnamiNta には 2 つの \*NC 子音連結 (\*mn, \*Nt) が含まれているので、前者を残し後者を単純化した \*mnamita と、後者を残し前者を単純化した \*namiNta の競合が予測され、上代中央日本語に実際見られる *namita-namida* の清濁交替を説明することができる。また、濁音から始まる語が少ないとことから、一般的に語頭の \*NC を残した形より語中の \*NC を残した形が好まれていたことが推察でき、*namida* のほうが現代日本語まで生き残った事実と一致する。

「涙」の他に、このような Lyman の法則の一般化で説明できる語には *timata* 「巷」と *ta<sup>ŋ</sup>gimati* 「当芸麻道」がある。Vovin (2020: 89) は、*miti* 「道」を *mi-ti* の 2 つの形態素に分析するしかない理由としてこの 2 語を挙げているが、*timata* は \*miti-n-mata 「道-GEN-股」 > \*mtinmata から語頭 \*mt の単純化、*ta<sup>ŋ</sup>gimati* 「当芸麻道」も同様に固有名詞である *ta<sup>ŋ</sup>gima* の原形を保持するために \*-miti > \*-mti 「道」の \*mt のほうを単純化したと考えると、\*miti とその母音脱落形 \*mìti > \*mti だけでも上記の 2 語を説明することができる。

## 4. 母音脱落とアクセントの起源

いわゆる「式保存の法則」(金田一 1937) に定式化されるように、同一の語根を語頭に持つ語は、同一の式（高起式または低起式）を持つ。しかし、母音脱落が想定される語の中には、母音脱落によって高起式 (A) から低起式 (B) に変わっているように見える語が存在する。(17) の 4 語は、Martin (1987) の動詞の一覧に載っている *CV<sub>P</sub>*- の語幹を持つ動詞の中から、意味的に \*CVC-àp- に由来する可能性があるものである。

<sup>10</sup> 形容詞語幹 \*jowas- からの派生として \*jowas-im- を立てる場合、\*juam-ap-i 「病気」は \*jowas-im-ap-i の二重母音脱落形になる。また、*nayam-* の前半が \*muna- 「胸」の母音脱落形 \*mùna- > \*mna- と考えると (\*mùna-itash- > \*mnaitas-? > *neta-* 参照)、\*najuam- 「悩む」は \*mùna-jowas-im- の三重母音脱落形になる。隣接する 2 つの音節の母音が脱落しない限り、一つの語の中で複数の母音が脱落することには、特に制限がないと思われる。

- (17) a. *kup-* B 「食べる」 < \**kur-àp-* 「食べる-ITER」 (*cf. kurap-* A)  
 b. *pap-* B 「這う」 < \**par-àp-* 「張る-ITER」 (*cf. par-* A)  
 c. *nup-* B 「縫う」 < \**nuk-àp-* 「抜く-ITER」 (*cf. nuk-* A)  
 d. *köp-* B 「乞う」 < \**kər-àp-* 「伏す-ITER」 (*cf. körös-* A, *koromb-* A, *köyi-* B?)

(17a) は、同じ意味を持つので、同根の可能性があることは自明である。(17b) は「這う」を「体を伸ばすことを繰り返す (to stretch repeatedly)」、(17c) は「縫う」を「穴を開けることを繰り返す (to pierce repeatedly)」と考えたもの、(17d) は「殺す」を逐語的には「伏させる」という意味を持つ婉曲表現とし、「乞う」を「ひれ伏すことを繰り返す」と考えたものである。

(17) の 4 語が実際母音脱落を経験しているという確証はないが、(17) の 4 語を参考にして仮説を立て、その仮説を検証することができる。まず、前提として、日琉祖語の母音脱落は強勢音節の直前の非強勢音節の母音が脱落する体系とする<sup>11</sup>。すると、2 音節語幹を持つ高起式の動詞は第 3 音節（語尾第 1 音節）に強勢を持ち、第 2 音節の母音が脱落するということになる。一方で、低起式の語の中には (17) のような式の逆転を示す語が見つかなかったことから、同様の母音脱落は見られないことが期待される。以下では、Martin (1987) の動詞一覧の中から単音節の語根に使役の \*-as(ai)- がついたものに由来すると思われる動詞のデータをもってこの仮説を検証する。*\*CVC-às(ai)-> CVs(e)-* を「脱落形」、*\*CVC-as(ai)-> CVCas(e)-* を「非脱落形」と呼ぶ。

- |           |   |
|-----------|---|
| (18)      | 高起式 (14)  |
| 脱落形 (4)   | <i>hesu kasu tasu yosseru</i>   |
| 非脱落形 (10) | <i>makasu mawasu narasu nukasu siraseru sukasu tirasu</i><br><i>tukasu ukasu wakasu</i>   |
| 低起式 (21)  |   |
| 脱落形 (1)   | <i>nasu</i>   |
| 非脱落形 (20) | <i>akasu awaseru hukasu hurasu ikasu kamosu kirazu</i><br><i>makasu mitasu morasu motasu nomasu owasu sekasu</i><br><i>sorazu sumasu terasu tokasu toraseru/torasu wakasu</i> |

高起式の語は、14 語のうち 4 語が脱落形を持ち、21 語のうち 1 語だけが脱落形を持つ低起式に比べて、極めて高い脱落率を示している。(17) の例とは違って、使役形は意味的な関連性が話者にとっても自明であり、類推によって脱落した母音を挿入して復元することができる点を考慮すると<sup>12</sup>、高起式非脱落形の存在は高起式 2 音節語幹動詞における母音脱落の反証にはならない。

<sup>11</sup> 第 1 音節の母音脱落例があるので、逆に強勢音節の直後の非強勢音節が脱落するという規則を考慮することはできない。

<sup>12</sup> (17) とは違って、(18) の高起式脱落形で式の逆転が生じないことも、類推による復元によるものと考えられる。

また、高起式2音節語幹動詞の第2音節母音脱落を想定すると、枕詞 *yasumisisi* の *sisi* が説明できるという利点がある。枕詞 *yasumisisi* は、『万葉集』では「八隅知之」「安見知之」と書かれるが、「知」は *ti* を表す音仮名としての用法以外は、動詞 *sir-*「知る」を表すために使われているので、当時の話者たちは *sisi* を *sir-* の活用形のように認識していたことがうかがえる。高起式の *sir-* に1音節の接尾辞がついた語幹は、高起式2音節語幹動詞の第2音節母音脱落の対象であり、*ya-sumi sisi* < \*ja-sumi sir-às-i 「8-隅 知る-HON-INF」を再建できる。

以上の議論に基づき、本稿では先日琉祖語（母音脱落が生じる前の段階）が強勢を持つ言語であり、先日琉祖語における強勢の配置が母音脱落を条件づけ、母音脱落後の強勢配置によって高起式または低起式が付与されたというシナリオを提案する。

## 5. おわりに

本稿では、日琉祖語において母音脱落によって子音連結が生じる枠組みを提案し、語源説によつて母音脱落が想定される語の具体例を挙げながら、子音連結の反映について考察した。更に、母音脱落規則の基礎的な検討から、先日琉祖語における強勢体系の可能性を提案した。

しかし、現時点では母音脱落の条件を完全に特定することができなかった。母音脱落仮説に基づいたより厳密な論証を展開するためには、母音脱落規則の解明が必要である。また、本稿では主に上代日本語の内的再建に基づいて議論を展開しているため、琉球諸語との比較によって再建体系を検証するような研究が求められる。

## 参考文献

- Erickson, Blaine (2004) Old Japanese and Proto-Japonic word structure. In: Alexander Vovin and Toshiki Osada (eds.) *Perspectives on the origins of the Japanese language*, 493–508. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies.
- Frellesvig, Bjarke (2010) *A history of the Japanese language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2004) The vowels of Proto-Japanese. *Japanese Language and Literature* 38: 281–299.
- 服部四郎（編）（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。
- 国立国語研究所（1974）『日本言語地図解説：各図の説明 6 および 300 面の地図の総目次』東京：大蔵省印刷局。
- 金田一春彦（1937）「現代諸方言の比較から観た平安朝アクセント 一特に二音節名詞に就て一」『方言』7(6): 1–43.
- Kupchik, John (2011) *A grammar of the Eastern Old Japanese dialects*. Doctoral dissertation, University of Hawai'i at Mānoa.
- Kupchik, John (2023) *Azuma Old Japanese*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press.
- Pellard, Thomas (2024) Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan. In: Bjarke Frellesvig and Satoshi Kinsui (eds.) *Handbook of historical Japanese linguistics*, 39–68. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.
- Ramsey, Robert S. and Marshall J. Unger (1972) Evidence of a consonant shift in 7th century Japanese. *Papers in Japanese Linguistics* 1(2): 278–295.
- Unger, Marshall J. (2008) Early Japanese lexical strata and the allophones of /g/. In: Bjarke Frellesvig and John Whitman (eds.) *Proto-Japanese: Issues and prospects*, 43–53. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Vovin, Alexander (2020) *A descriptive and comparative grammar of Western Old Japanese: Revised, updated and enlarged second edition*. Leiden/Boston: Brill.

## Consonant Clusters in Proto-Japonic

YUN Huisu

Graduate Student, The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI  
/ Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

Proto-Japonic has traditionally been reconstructed as a language consisting mostly of simple open syllables of the CV structure. However, a careful internal reconstruction of Old Japanese, especially its adjective conjugations, suggests that Proto-Japonic must have undergone a diachronic vowel deletion process that resulted in a variety of consonant clusters. In this paper, I present a new reconstruction of several Proto-Japonic words, which enables them to be better etymologized. Furthermore, it is hypothesized that vowel deletion was conditioned by an earlier (pre-Proto-Japonic) stress placement that later shifted to tonal register distinction.

**Keywords:** Proto-Japonic, Old Japanese, internal reconstruction, vowel deletion, consonant clusters